

序

今日の眼科診療においてはOCT (optical coherence tomography) およびOCTアンギオ(OCTA) が中心的な役割を果たしています。私は25年前から眼科診療を行ってきましたが、今日の診療方法は大きく進化したと感じています。以前は、眼底検査に接触型の前置レンズを使用することが主流で、造影検査を必要に応じて行うのが一般的でしたが、現在ではその枠組みが大きく変わってきました。眼底に疾患の兆候が見られた場合には、通常まず初めに非侵襲的なOCT/OCTAを用いて検査が行われます。そして、確定診断に必要な場合にはより侵襲的な検査を検討し、場合によっては専門施設への紹介も検討されます。

このような状況の中で、OCT/OCTAに関する解説書が複数出版されてきました。しかしながら、これまでの教科書は一律であり、基本的に疾患ごとにOCTもしくはOCTAの画像を提示し、その所見を説明するスタイルが一般的でした。また、典型的な所見を集めたアトラスとして作成された成書もあり、各疾患に関連する画像が記載されていることもあります。

しかしながら、実際の臨床現場では、網膜疾患を専門としない若手医師や開業医の中には、OCT/OCTAの所見を正確に解釈し、それに基づいて疾患を診断するのが難しいという課題があります。また、特定の視神経疾患(例えば緑内障)においても、OCTでの診断においては黄斑のスキャンが重要であるにもかかわらず、視神経乳頭のスキャンのみを使用している医師も多いという実情もあります。

こうした現実の臨床の課題に対応するため、私は本書の執筆に着手しました。本書は、初心者からベテランまで、すべての経験レベルの医師がOCT/OCTAの所見をもとに診断につながるスキルを身につけることを目指した教科書です。また、視能訓練士や検査に携わる人々にも、どのような所見に注目して検査を行えばよいかを理解する手助けとなるように、所見ごとに鑑別のポイントを詳細に解説しています。さらに、疾患ごとに詳細な解説を加えることで、他の教科書なしでも理解できる内容となっています。

このように、本書は、臨床現場で実際に直面する問題に焦点を当て、確実な診断を支援する情報を提供しています。本書を手にするだけで、OCTおよびOCTAを駆使した診療において迷うことはないかと確信しています。ぜひ、この一冊がOCT/OCTAを用いた診療において、あなたの確かな診療指針となることを願っています。

2023年8月

横浜市立大学 大学院医学研究科 視覚再生外科学教室 客員教授
柳 靖雄